



SGI-USA の50 年(1) ハワイから西海岸まで：
アメリカ合衆国における創価学会インタナショナル

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋庭, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002821

SGI-USA の 50 年 (1) ハワイから西海岸まで

—アメリカ合衆国における創価学会インタナショナル—

秋庭 裕*

1. ハワイ—SGI の黎明

それは、ハワイ現地時間、1960 (昭和 35) 年 10 月 1 日の深夜のことであった。

ホノルル空港に到着した日本航空 800 便から降り立った、創価学会会長池田大作を迎えたのは、22 歳の青年 TH ただ一人であった。

この年 8 月日本で初めて就航した大形ジェット旅客機 DC-8 型は「富士号」と名付けられ、この日 JL800 便として池田ら一行をホノルルへと運んだ。空の旅も本格的なジェット時代を迎えていた。それでもまだ羽田—ホノルルは、なお 7 時間以上を要する長旅であったが、このときはさらに一時間遅延した¹。

いずれにせよ、初めて海外訪問へ旅立った池田大作は、海外への記念すべき第一歩を標したとき、たった一人の青年会員に迎えられただけだった。

じつは、このさびしい出迎えは連絡ミスによるものだった。出発前にハワイ在住の 30 数名ほどの会員を中心に、池田会長一行を歓迎する準備が整えられていたのだったが、信濃町の学会本部から誤った到着時刻が伝達されてしまい、一行を出迎えることができなかつたのである。今となつては隔世の感があるが、創価学会インタナショナル (Soka Gakkai International) の記念すべき第一歩は、このようなハプニングによって踏みだされたのである。

なぜ、TH 一人のみは、池田を迎えることができたのだろうか。その事情についてはまた後に述べることにする。彼が、その日その時刻に池田を出迎えることができたのはたんなる偶然ではなく、それを知るには、TH 親子三代にわたる日米をまたぐ、濃密な人生の物語を紐解かねばならないからである。

いずれにせよ、このとき池田を迎えた TH こそ、175 万人以上を超える創価学会インタナショナルの最初の海外会員なのである。

SGI の歴史は、32 歳の池田大作が第三代会長に就任直後、ハワイ・北米・南米へ初の海外訪問に出発したときに始まるといってよいだろう。池田のこの海外初訪問の旅によって、創価学会は日本国外への布教を本格的に開始した。

1960 (昭和 35) 年といえば、敗戦からわずかに 15 年後のことであるが、第二次大戦後、ほとんどゼロからスタートした創価学会は、この年すでに 150 万世帯の会員から成る、戦後日本社会にそびえ立つ巨大組織宗教となっていた。

戦後またたく間に創価学会を巨大宗教に押し上げたのは、第二代会長戸田

*大阪府立大学大学院人間社会学研究科 akibayuh@hs.osakafu-u.ac.jp

¹ 三代会長年譜編纂委員会編 2005:25-6

城聖^{じょうせい}の功績である。戸田は1958（昭和33）年春に没したが、池田は師である

戸田の「東洋^{こうふ}広布」の遺訓を踏まえながら、まずアメリカ合衆国にその第一歩を標したのである。池田は恩師の写真を上着の内ポケットに納め、戸田の命日を選んでハワイへ出発した。

それにしても、創価学会の海外布教が、早くも1960年に開始されたことの意義は重要である。「もはや戦後ではないという」フレーズがこの数年前に流行したというが、まだ高度経済成長は緒についたばかりで、国際化やグローバル化の到来は、はるか遠い彼方のことである。池田の海外訪問の開始は、新宗教の海外布教として非常に早い時期に属するが、以来一貫して、創価学会はその努力を継続していることは注目に値する。今日SGIは、世界192カ国・地域に展開するが、このような広まりは日本宗教のなかでは群を抜いている。

それにしても、第三代会長の就任式が5月3日のことであったから、10月2日のハワイへの出立は、池田が会長に就任するや否や実行されたというべきであろう。池田の海外への訪問計画は、就任式の一ヶ月後に開催された第二回本部幹部会において、沖縄（7月）・南北アメリカ（10月）・インド（翌1月）への一連の訪問計画として発表された²。

この計画が発表されたとき多くの会員は予想もできないことで非常に驚いたという。しかし、この訪問計画の意図は、計画全体を見渡してみると比較的明瞭に理解できるかもしれない。それは、海外初訪問に先立ってまず沖縄を訪問し、会員の指導を行ったことに明らかであると思われる³。

日本国内で唯一の戦場となった沖縄への渡航は、当時アメリカの施政権下にあったからパスポートが必要であった。戦火で深く傷ついた沖縄をいち早く訪問し、とって返すようにアメリカを訪問したことは、おそらく会長就任後に思いつきで実行されたのではないだろう。それ以前から胸中に秘められたヴィジョンにしたがって、周到に計画されたものであったにちがいない⁴。

そのヴィジョンがどのようなものであったかは、順を追って追っていくことにしよう。その一つの最初の手がかりとして、戸田が説いた「東洋^{とうよう}広布」であ

² 三代会長年譜編纂委員会編 2005:15

³ 池田の手になる『人間革命』は、戸田城聖を主人公として戦後の創価学会の歩みを鳥瞰する長編小説である。その冒頭は「戦争ほど、残酷なものはない。戦争ほど、悲惨なものはない。」という書き出しで始まるが、沖縄において執筆開始されたことがしばしば強調されている。「もっとも日本列島のなかで、悲惨と苦渋をなめた沖縄の地でしたたためたいと思ったのである」。池田大作『私の履歴書』143-4頁に詳しい。また、聖教新聞 2013/7/16 p.2 も参照のこと。

⁴ 沖縄への出発の前日（7月15日）に学会本部庶務部に「海外係」が設置されている（三代会長年譜編纂委員会編 2005:16）。

った海外への布教が、なぜ池田によってハワイ・北米・南米への訪問となったのか、この間の事情を想像してみたい。

「東洋広布」とは、東洋への「^{こうせんるふ}広宣流布」ということである。つまり、法華經の教えを広く^の宣べて流布させるということが広宣流布の意味で、創価学会が抛りどころとする日蓮は、「法華經の大白法の日本国並びに一閻浮提(=世界)に広宣流布せん事」⁵は疑いもなく、「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし」⁶と述べている。

戸田は、海外への広宣流布の夢をしばしば語ったと伝えられている。しかし、戸田がしばしば用いたのは「東洋広布」という文言であって、戸田の言葉を聞いた当時は、誰もがまずは近隣のアジア諸国から広布(広宣流布)は着手されるのであろうと考えていたという。

ところが、そういう見解をよそに、池田はホノルルを振り出しに、サンフランシスコ・シカゴ・ニューヨーク・サンパウロ・ロサンゼルス等の北南米にわたる3カ国9都市を、24日間の日程で駆け抜けたのである。

このときの池田の初めての海外訪問の目的は、第一に、海外に誕生しはじめた会員の激励と指導、第二に、総本山大石寺に建立寄進する予定であった大客殿を荘厳する資材の買い付け、第三には、世界広布の将来構想のために、海外事情の視察であったという。今日伝えられているこれらの目的をもう一度よく考えると、戸田の説いた東洋広布が、どのように世界広布へと発展的に解釈されたのが推測できるかもしれない。

戸田は、日蓮の「諫暁八幡抄」⁷や「顕仏未来記」⁸の記述にもとづいて「仏法西還」を主張した。「顕仏未来記」には、「仏法も・・・正像には西より東に向かい末法には東より西に往く」と述べられている。つまり、仏法はこの末法の時代において「東漸」から「西還」へと転じ、日本から西へ(アジアへ)向かうと述べられているわけであるが、池田はこの西をいわば「西洋」と読み替えて、1960年北南米訪問を実現したということになるだろう。

この時代、池田がどうしてもアメリカに行かねばならぬと考えた事情を想像してみよう。敗戦後いまだ15年にすぎない当時、日本社会には、戦勝国アメリカの^{プレゼンス}存在が、人びとの生活のなかで、また意識のなかでも、圧倒的だったはずである。そういう時代のなか、第三代会長に就任した池田は、まず最初に

⁵ 御書 (『日蓮大聖人御書全集』) 265

⁶ 御書 329

⁷ 御書 588

⁸ 御書 508

アメリカに行かねばならない、ぜひ見ておかねばならない、という使命感を抱いたのではないだろうか。

多感な少年時代から青年期、池田は戦争の不条理を身にしみて味わった。長兄をビルマ戦線で失い、東京大森の海苔製造業の生家は戦争によって没落し、生活は辛酸を嘗めた。

17歳で終戦を迎えた池田は、30年後に半生を振り返り「焼け跡の向学心」⁹を綴っている。そこでは「何を支柱に生きていくべきか、若者たちは、悩んだにちがいない。私も、その一人であった。無性に勉強がしなくなった。戦争という異常事態下にあつては、好きな読書も満足にはできなかつた。そうだ、ともかく学校へ行こう」と述べられている。戦後の荒廃と虚脱のなかでの困窮と苦闘を綴る文章の合間に、既成の価値観が崩壊してしまった時代にあつて、未来を探究しようという好奇心が散りばめられたような記述がじつに印象的である。

「ともかく学校へ行こう」という思いは、夜学生として苦学する日々として実現する。若き日々、苦境にあつても未来へ向かつて時代や社会を探究しようという好奇心を忘れることのなかつた池田が、まだ青年と呼ぶべき32歳のとき就任した創価学会新会長として、戦後日本の運命と行方に大きな影響力をもつアメリカ合衆国を、一目この目で見ねば何事も始まらぬと思ったのは、ごく自然のことだったのでないだろうか。

2. 最初の一人

1960年の海外初訪問によって、ハワイ・サンフランシスコ・ネバダ・シアトル・シカゴ・ケンタッキー・ニューヨーク・ワシントンに「地区」が結成された。そして、ロサンゼルスとブラジルに「支部」がおかれ、また、これらを統括するアメリカ総支部も設定された。アメリカ総支部は、もちろん海外初の総支部であり、日本国内を含めると11番目の総支部であつたが、その包括する世帯数は約300にすぎなかつた。

最初の訪問地のハワイは、さまざまな機縁で日本と深く結びついている。ハワイは明治以来日本人移民の入植の歴史があり、今日でも日本人と日系人が多い。また、1941（昭和16）年日本海軍連合艦隊による「真珠湾攻撃」によって、太平洋戦争の火蓋が切られたことも、ハワイと日本の歴史において忘れることができない大事件である。池田らがまずハワイを訪れたのは、たんなる経由地という以上の故あることであつた。

まず一行は、ホノルル近郊のパンチボールの丘にある「太平洋国立記念墓地」を参詣し、題目を三唱し戦没者に弔意を表した。そして、真珠湾を臨んで「歴史の教訓を胸に刻み、世界不戦の潮流を高めゆく決意を留め」と、後年池田

⁹ 池田 1975:63-7

は述べている¹⁰。

ハワイにおける草創期のSGI会員に、ハワイ社会のこのような歴史的経緯、つまり移民と戦争の刻印を免れたものはない。ハワイの日本人と日系人が経験した苦難は深く、その歩んだ道のりは幾重にも屈折している。1868年に始まる日本からの移民は、1924年に排日移民法が制定されるまでで21万人に達した。日本人移民はハワイに渡った最大規模の移民集団だったのである。

ハワイ住民の民族構成に、ハワイ社会の特徴がよく表れている。1980年代末の総人口約100万人のうち、最大人口が白人で23%強、これに次ぐ第二位が日系人でこちらも約23%に達する。近年は白人の割合は増加し、戦前から戦後にかけては40%にも達した日本人・日系人の割合は下がったが、ハワイにおいてその比重がいかに大きいものであるかを理解できるだろう。第三位は、混血を含むポリネシア系ハワイ人の21%、ついでフィリピン系が11%、中国系の5%、アフリカ系(黒人)が2%となる。要約すると、ハワイは米本土と較べて、白人が少なく、日系人が多く、黒人が少ないという特徴を指摘することができる。

今日ではハワイの日系人は、技能職や事務職、あるいは小売業の従業員などに従事するものが多く、ハワイ社会の中流に位置している。しかし、戦前期ハワイの日本人は、男性は砂糖きびプランテーションの労働力として、女性は白人家庭のメイドとして雇用されるのが典型であったように、単純非熟練労働に従事するものが主力であった¹¹。

戦前からこのように縁の深いハワイと日本であるが、それが太平洋戦争によってどのように引き裂かれたのかここでは詳論することはできない。しかし、そういう時代のなかでさまざまな苦難を経験した人びとの心を、日蓮仏法を伝える創価学会=SGIの教えが捉えたということであろう。それはいったい、どのような理由で人びとを魅了したのであろうか。それを探求していこう。

冒頭で紹介した、一人池田を迎えたTHは、1937(昭和12)年の生まれで喜寿を迎えたが、彼の人生もまた、日本とアメリカ、そしてハワイを舞台とした歴史に激しく翻弄された¹²。

祖父は山口県の萩の裕福な家庭に生まれ、長じてハワイ島に渡り、ヒロで食料品問屋を営むなどしていた。父は日系二世として、ハワイ島に生まれヒロ高校を卒業した。戦争前に祖父は弟に問屋を譲り、息子である父を連れて日本に帰った。父は神戸大学に進み、大学時代に知り合った女性と結婚し四人の子供が産まれた。しかし、その父はTHが4歳のとき結核を病み亡くなってしまう。まだ26歳の若さであったという。

¹⁰ 池田 2007:68

¹¹ 山中速人 1993

¹² TH氏およびその夫人へのインタビューは、2006年1月29日および2009年5月23日にホノルルのSGIハワイ文化会館で行った。

このときから TH の苦難の人生がスタートする。父の死後ほどなく山形県鶴岡の母の実家に、二歳ちがいの兄と TH の二人だけが連れて行かれた。しかしその母は、すぐに二人の子供を残して出奔してしまったとのだいう。母の兄である伯父は、幼い二人の兄弟が何か失敗すると、些細な事であっても、長い鉄の火箸で殴るのであったという。兄が背中を打たれたときの、「ガチッ、ガチン」という骨を打つ音が今も TH の耳の奥底に残っているという。こんなところになぜ自分たちをおいて出ていったのかと、母を恨んだという。

小学生のとき宮城県に養子に出されるが、養子とは名ばかりで、労働力として「人買い」に売られたのだという。山村の果てしのない仕事もつらかったが、何よりの苦難はやはり、いじめられたことであったという。T という英語名のために、戦前の山村の人々には悪魔が来たかのように言われたのだという。鬼畜米英を国是とする時代、紛れもない日本人である TH は、父が二世であることと英語の名前であることとによって、周囲の人々からじつに残酷な仕打ちを受けたのである。

TH の人生はその後も苦難が続くが、ここまでの歩みからだけでも、戦前から戦後にかけて日米間の憎悪がいかに深いものであったかが理解できる。TH は身も心も深く傷つく幼年時代を送った。戦争の悲劇は語っても語りつくせないだろうが、東北の山村の一度もアメリカ人を見たことのなかった人びとまでもが、敵国人に対する深い憎悪の念を植えつけられていたことを忘れてはならないだろう。

養子先は石巻から太平洋に付き出した先端の雄勝町というところだったが、半農半漁の村で TH は一週間学校に通うと、次の一週間は子守をさせられるという生活が続け、中学を卒業するとすぐに福島県小名浜でイワシ漁の漁船に乗せられた。給料は養父に直送され、TH は手にしたことはなかった。

イワシ漁船の次に近海マグロ船に乗せられた。1954（昭和 29）年 9 月、青函連絡船洞爺丸が台風によって遭難し沈没した。この洞爺丸の事故は、わが国海難史上最大の惨事で千人以上の人命が失われた。ちょうどこのとき、TH の乗ったマグロ船は小笠原沖にあったのだが、100 トンほどの近海マグロ船もまた山のような大波に呑み込まれそうになっていたのである。

TH は機関員であったが、船窓から見ると全部が水であとは何も見えなかったという。まるで潜水艦に乗っているようなものであった。じつは、大きなビルよりも高い大波が来るときは、それに突っ込むのが一番安全なのだというが、生きた心地はしなかった。木造船の船体の板と板の間から「ダダダッ、シューッと、剃刀の刃のような水が」差し込んでくるのだという。海の男達もまた皆恐ろしくて泣いていた。ところが、TH は「ぼくは、こわくなかった。（大波も）けっこうと。（それまでに）死んだ方がいいと思ったことが何回もあったから」。

でも、「もし助かったら、船を止めて、もう一度母を捜してみようと思った。

そして、次の正月元旦に船を止めた」。まもなく 19 歳というとき、養親に黙って、船長には無理を言い最後の給料だけはなんとかもらって、それを手に「逃げた」。

TH は 10 年ぶりで母と兄とに再会をはたす。しかし、母は心に思い描いていた母とは異なっていた。母は、再会后ほどなくまた姿を消してしまったのである。そういう母であっても、TH はまた母に会いたくて仕方がなかった。TH は母と別れても母が恋しく、二度三度と母を探した。そうして、母とその次に再会したとき、母は横浜の TH の生まれた家に連れて行くと言って聞かなかった。生家は他人に買われていたが、訪ねて行くとその家を買った U さんから TH は折伏されたのである。

TH が U さんに身の上話をすると、それは「宿業っていうんだよ」と言われた。「お母さんが悪いんじゃないんだ。代々もって生まれてきたものが悪いと。そして、そういうものを切るには創価学会の教えしかないと言われる。「T ちゃん、結婚して子どもをもって、またそういう道を歩かせたくないでしょ」とさとされた。

しかし、TH が入信したのは、U さんの説く宿業論に納得したからでない。U さんが、「初めて、人間として対等に話してくれた」と感じたからである。「世の中には、こんなにいい人がいるのか」と驚いたというのである。

U さんは「よくなるよー、これから。」と何度も言い、「たとえどんなことがあっても、お母さんは世の中に一人しかいないんだ。お母さんは悪くないんだ」と繰り返した。それで、それまで絶対神も仏も信じないとそう決めていたが、U さんの優しさに心を動かされ、それでちょっとやってみようと思ったのであるという。それが、1956（昭和 31）年 2 月 28 日、19 歳のときであった。

このあとすぐにハワイ島の伯父から母宛に送られてきたハガキを見つけた。真っ赤に焼けた小さいなポストカードであったが、その住所に返信の手紙を送ると、「よかったらハワイに来ないか」と返事が来たのである。U さんは「T ちゃん、これ初信の功德だよ」と言っていたが、「ああ、これで父の実家に行ける」と思うとなによりも嬉しくて、躍り上がったのだという。

ハワイへの出発の手続きを終え準備が整った 1958（昭和 33）年 9 月 17 日、信濃町の旧学会本部で青年部参謀室長であった池田を訪ねる機会があった。池田は、この当時海外へ渡航する会員を積極的に激励していたのである。この時代からまたこれ以降も、池田に直接に励まされ海外へ出発した会員は非常に多い。

そのとき、じつは心からそう思っていたわけではなかったというが、「先生、ハワイに行ってどういうふうに折伏したらいいんですか」と尋ねると、「折伏しなくていいよ」というのが池田の答えだったという。「あれ、おかしいなと思っていると、『皆に好かれる青年になりなさい』と言われたのだという。『皆に好かれる青年になれば、自然におのずと折伏できる』と先生がおっしゃった」。

日本出港は 9 月 18 日だった。9 日間でホノルルのアロハ棧橋に到着した。9

月 26 日にハワイ島ヒロ近くのパホアの伯父の家に着いた。パホアでは伯父の食料品の卸問屋で、早いときは朝の 4 時から、遅いときは深夜まで牛馬のように働いた。ハワイ島では信心はできなかった。「いずれその時がきたらやる」と思っていたが、まだ題目ひとつをとっても人前で行なう勇氣はなかった。

ちょうど二年後、日本から聖教新聞と手紙が送られてきた。それには池田会長がホノルルに行くから出迎えてほしいと記されていた。それで、伯父さんを口説いて、それまで一銭もお金をもらっていなかったので、必死でホノルルに行きたいと願い出た。伯父さんは熱心な本願寺の念仏者でもあったし、自分もめったにホノルルに行ったりしないのだからと返事を渋ったが、結局、今まで仕事もよくやってもくれたしと、ホノルル行きを許してくれた。

日本からの手紙には、強い調子があった。池田先生をお出迎えしてほしいのは、一生を左右する大事なことから、ぜひ行きなさいと記されていた。またそれに、出発前に先生にお目にかかり、先生を忘れられなかったので、ぜひもう一度お会いしたいという気持ちもあったという。

このように、TH が、その日その時、池田を迎えるために、ホノルル空港ロビーに到るには、非常に長い旅路を経てのことであったのである。このときハワイに海外初の地区が結成されたが、TH は男子部班長に任命されている。また 1966 (昭和 41) 年には、ハワイ文化会館の初代事務長に就任している。

3. War Bride

池田が激励したのは、TH ばかりではなかった。

1960 年の海外初訪問によって創設されたアメリカ総支部が包括した数はおよそ 300 にすぎなかったが、それらの会員の大部分が「戦争花嫁」として渡米した女性たちであったことは注目に値する¹³。戦争花嫁とは、第 2 次大戦後日本に駐留したアメリカ軍を中心とする兵士や軍属と結婚した日本女性のことである。その数は、1960 年頃までに 4 万人から 5 万人に達するという¹⁴。

私は、ハワイで 4 人、ロサンゼルスで 1 人の戦争花嫁として渡米した会員にインタビューを行なった。最年長の方は 1928 年生まれ、最年少の方は 1954 年生まれであった。最年少の方は 1974 年に結婚後、しばらくは日本国内の米軍基地に居住し、渡米したのは 1980 年のことであったという。戦争花嫁という言葉は、終戦後まもない時代を連想させるかもしれないが、実際はもっと長期間にわたる日本女性の国外への移動として、特徴ある社会移動であった点は注意すべきである¹⁵。

また、「戦争花嫁」という言葉が頻繁に用いられていた時代に、その響きが

¹³ 井上順孝 1985:152-4・中野毅 1985:45

¹⁴ 安富成良／スタウト和子 2005

¹⁵ 朝鮮戦争 (1950-1953) において日本は国連軍＝米軍の兵站基地となり多くの兵士が駐留している。

もった意味は失われて久しいが、戦争の記憶がまだあせぬ時代に、元敵国男性に嫁す女性は、偏見に満ちた視線と言葉を浴びせられた。戦争花嫁にたいする偏見や差別は、激戦を戦った敵国にたいしてまだ冷めやらぬ反目感情が、ジェンダー的な不平等を増幅し、「戦争-花嫁」という言葉に、ステレオタイプの差別的な意味が結晶化したものだろう。

戦争花嫁は日本においてのみならず、渡米後も差別や排斥を受けた。日本においてできあがっていた偏見が、日系メディアによって伝達されていたからである。彼女たちは、日米の狭間に取り残されたような孤独のなかで辛酸をなめた。米国人の夫はいても、他に友人・知人のない異国での孤独、そして理由のない偏見や差別、これらに苦しむ女性たちに日蓮仏法はどのような励ましのメッセージを与えたのであろうか。

今日もホノルルに在住する E さん（1937 年生まれ）¹⁶も、戦争花嫁としてハワイに渡った一人である。E さんもそうだが、渡米前にすでに創価学会員であった方は少なくない。

E さんは、1961（昭和 36）年 5 月、日大講堂での第 23 回本部総会の席上、会長就任一周年記念の池田の講演が今も鮮明に記憶に残っていると回顧している。E さんは、このとき参集した 2 万 5 千人のうち一人として、通路に座る用意にゴザと座布団を持参して出かけたのであった。そこで、「創価学会は、日本の柱であり、世界の太陽である」と述べた池田の講演に動かされ、海外への広宣流布の意欲を強くかき立てられたという。

この本部総会において、学会本部機構の拡充が発表され、それには海外部の海外局への昇格も含まれていた。またこの一年の歩みが報告され、学会の総世帯数が、140 万から 191 万余世帯へ、支部数は 61 支部から 139 支部へ発展したこと、また海外では、ロサンゼルスとブラジルに支部が結成され、アジアでも香港に地区が生まれたことが伝えられた。なおアメリカ総支部の世帯数はこの一年で約 1500 世帯に達したことも報告された。この日には、ロサンゼルス支部とブラジル支部に支部旗の授与も行われている¹⁷。

E さんは、海外へ広宣流布をとという池田会長の講演を受け、本部総会の後すぐに英語学校に通った。英語学校を終了するとすぐに、横須賀の米軍キャンプの将校クラブに勤務するようになり、そこで知り合った海軍兵士と 1962 年 2 月に結婚し、翌年ハワイに渡った。

E さんは、ハワイに立つ直前、信濃町の学会旧本部に招かれた。この時代、H 氏の場合もそうであったが、会長自ら海外に渡る会員を丹念に励ましていた様子がかがえる。E さんは、池田の急用によって面談はかなわなかったが、海外局長から、『あなた方のように、アメリカに渡ってくださる方がいるから、

¹⁶ E さんへのインタビューは、2005 年 12 月 29 日および 2006 年 1 月 28 日にホノルルの SGI ハワイ文化会館で行った。

¹⁷ 三代会長年譜編纂委員会編 2005:59

世界平和が早く成るんだ。身体に十分気をつけて』という池田の伝言もらい、それを胸にハワイへと旅立った。

池田が会長就任時より一貫して海外広布の強い意欲をもっていたこと。そして、それをコツコツと地道に進めたことがうかがえる。当時は海外への自由な渡航は制限されていたから、一人ひとりの海外へ渡る会員を布教の貴重な機会ととらえ可能なかぎり激励したのであろう。

Eさんのハワイ渡航後の足取りをたどってみよう。戦争花嫁といわれた日本女性はじっさいどのような生活を送ることになったのであろうか。じつは、ハワイでの生活は事前には予想できない困難に満ちていた。まずライフスタイルの違いに戸惑った。なによりも金銭面での苦労が最初に来たという。1ドルが360円の時代だったので、日本では裕福に思えた夫のサラリーも、アメリカに来てみるとじつに安月給であることにすぐに気がついた。

さらに、その財布のヒモを完全に夫が握っていて、自分の自由になるお金がまったくなかった。これがなにより辛いことだった。だから、とにかく自分で働きたかったのだけれども、それも夫に許してもらえなかった。夫婦のあり方や家計の切り盛りの仕方があまりにも日本とかけ離れていたのである。

そこで、あらためて信心しかないと思いきりこし、ハワイに到着して10日後に組織の責任者に手紙を出した。Eさんの、ハワイでの生活基盤の確立は、信仰によって結ばれた会員との交流なしには困難であった。地区の責任者に指導を仰ぎ、「祈りとして叶わざるなし」という日寛上人の文段の一節をいわば再発見する。この一節はEさんが日本時代いつも困難に出会うたびに心の支えとした一節である。

この一節は、江戸中期の大石寺の法主、日寛の『観心本尊抄文段』の序文で、今日もよく引用される。「この本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来たらざるなく、理として顕れざるなきなり」¹⁸と、現世を意志によって力強く切り開く、日蓮仏法のエッセンスを表明するようなフレーズである。

手紙を出すとすぐに班長さんが訪ねて来てくれて、そこから今度、地区座談会に行きましょうということになって、ハワイに着いて2週間後に地区座談会に出たという。その地区座談会で、SGIの前身である、当時のNSA (Nichiren Shoshu of America)の第1回全米総会が、8月にシカゴで開催されることを知ったのであった。

その地区座談会で皆に「啓蒙」されて、「いやあ、大変なことになっちゃった」と思ったが、でもシカゴに行ってみたくて強く思ったという。ハワイに到着して間もないときだったが、「全米」と聞くと、いったいどのような人がどれくらい集まるのか、どんな信心をしている人がいるのだろうかという好奇心が夢のように広がったのだという。

¹⁸ 聖教新聞 2007/12/8 p.6

しかし、その夢はすぐに萎んだ。金銭的な余裕がなかったのである。「お金がないのに、どうやって行くんですか」と、地区部長に尋ねると、「祈りとして叶わざるなしの御本尊」でしょと励まされたのであった。

夫に事情を話すと、反対はされなかったが、「お金をどうするんだ」と即座に尋ねられた。「お金は、借りるほかない」と答えると、「アメリカは日本と違うよ。あなたは仕事をもっていないんだ。ぼくのサインがなければ、銀行で貸してくれるわけがない。ぼくのサインなしで、銀行からお金を借りることができたら、(シカゴに) 行きなさい」と言われたのであった。

「アメリカン・スタイル」でいえば、どう考えても不可能なのであったが、「私は、祈りとして叶わざるなしの御本尊を持っているんだ」と思って一心に祈ったのであるという。「御本尊様、全米総会は、アメリカに来た以上は、私は使命があって来ているんだから、その使命を果たすために、どうしても見たいと」祈ったという。「全米から集まってくる人たちと会いたい。どうか、銀行からお金を、主人のサインなしで貸してもらえますようにと、題目を上げて、ハワイバンクというところに行った」。

銀行の責任者の人から、やはり「ご主人のサインをもらえますか」と尋ねられたのであったが、「主人はサインしないって言うんですけど、私は仕事をしています。どうしたら貸していただけるんですか」と答えると、責任者はじっとEさんの顔を見つめ、「あなたは正直な人だね。お金を貸しましょう」と、500ドルを貸してもらえたという。

夫にその500ドルを見せると、銀行で借りたことをすぐには信じてもらえなかった。「ぼくのサインがなくて、まさかどうして。あなた、泥棒してきたんじゃない」と言われたというが、このようにしてなんとか、1963年8月シカゴで開催された第1回全米総会(アメリカ総支部総会、1500人が参加)に出席することができた。

この第1回アメリカ総支部総会において、欧米本部が設置され、アメリカ総支部は東西の二分割されアメリカ東、アメリカ西の両総支部が結成された。欧米本部には、アメリカの二総支部と南米総支部、ヨーロッパ総支部の計四総支部が所属するようになり。北米では、サンディエゴ支部、コロラド支部、ケンタッキー支部が新設され、カナダには班が生まれている¹⁹。しだいに会員数は増えつつあったことがわかる。

Eさんの夫は、保証人もなく銀行で融資を受けることができたのをはじめとして、Eさんの信仰から影響を受け、「自分も信心する」と言って、翌年「出張御授戒」をいただき信心を始めた。この年から、大石寺から僧侶が出張し御授戒を授けたのであった。

ところが、夫には軍から信仰を止めるように圧力がかかった。「創価学会というのは、Communistだから、あなたは海軍であるし、もうすこしで士官なの

19 三代会長年譜編纂委員会編 2005:157

だから、そういう人が共産党に入っているというのは、軍規に反しているということで、(信心を)止めなかったら、軍から出て行ってもらう」という圧力があったのだという。夫は、入信後まもない頃で、そういう圧力をはね返すほどの力はなかったので、信心からは遠ざかってしまった。

夫のことはあったが、Eさんの信心はゆらぐことはなかった。1965(昭和40)年8月、第20回夏期講習会が総本山大石寺で行われ、アメリカ・ブラジル・ドイツなどの海外メンバー300人が参加した。ハワイからは15名が参加したが、Eさんはそのなかの一人であった。そのときは一週間ほどの滞在であったが、「(池田)先生から、また激励していただいた」のであった。

「先生が、ハワイのメンバー全員を招待してくださって、(大石寺の塔頭に)理境坊というところがあったのですが、その理境坊に招待してくださって、そこで夕食をごちそうになって、一人ひとりにいっしょに勤行をしてくださって、一人ひとりにかけてくださる言葉が全部違ったんですよ。で、私の番になったときに、先生が肩に手をかけてくださって、『何でも知っているよ。頑張ってくれているね。ありがとう。』っていう言葉をいただいたんですね」。先生に「何でも知っているよ。頑張っているね。」と言われ、「ああ、先生が知っていてくださる」と、Eさんの胸中には思いがこみ上げるものがあった。

1965年は、Eさんにとって多忙な年であった。大石寺の夏期講習会から戻ると、その明るる日、すぐにロサンゼルスに旅立った。ロサンゼルス近郊のエチワンダで、アメリカ初の日蓮正宗寺院の恵日山妙法寺の起工式に立ち会うためであった(起工式は8月15日。落慶は1967年)。このころまでにアメリカの会員数は、およそ2万世帯にまで伸びたことが記録されている²⁰。

日蓮正宗が創価学会を「破門」して以降(1991年1月)、今日では両者の関係は断絶しているが、この当時は緊密な時代であった。妙法寺の落慶法要には、もちろん当時の日蓮正宗大本山大石寺の細井日達法主と池田会長の姿があって、豪壮な一大ページェントとして営まれた。

Eさんも、今日では宗門には憤懣やるかたない思いが深い。1967年に着工、1972年に落慶した「正本堂」には、けっして楽ではなかった生活のなか、「322ドルの給料から、165ドル家賃を払って、主人が50ドル、私が50ドルのdonationした」のであった。Eさん夫妻が100ドルも「供養」をしたのは、大石寺での夏期講習会において、池田会長じきじきに、建立が決まった正本堂は、すべてイス席の、今日の世界の大仏法にふさわしい建築とするという挨拶を聞いたこともその理由であったかもしれない。実際に竣工した正本堂は、大石寺の多くの建築を設計した横山公男の作品の集大成でありまた渾身の力作というべき圧

²⁰ 三代会長年譜編纂委員会編(2005:248)では約2万5千世帯と記されているが、上藤・大野編(1975:263)では約1万5千世帯となっている。また、ハモンド/マハチェック編(2000:64)では、4000人となっている。これらの会員数の推計の仕方については、前掲書を参照のこと。

倒的な「構造表現主義の傑作」²¹であった。

しかし、「あの大きな正本堂ね、あれも潰しちゃうの。ふつうの人間のやることじゃないですよ」と今も憤りを強く感じている。創価学会が本山に建立、寄進した、特色あるモダン建築の偉容を誇った正本堂は、1998（平成10）年、宗門によって解体されてしまった。

さて、Eさんは1966年6月にハワイを発って、故郷の横須賀に戻った。そして、一年半後の1967年12月に、今度は夫の実家であるテキサスに移動することになった。夫が戦地ベトナムへ赴いたためであった。

「彼がベトナムに行って、なぜ池田先生があれだけ平和を叫ばれるのかっていうのが、よく分かるんですよ。人間が、180度、いや360度って言った方がいいんかしらね、主人がまったく人間が変わっちゃったんです。」

夫はベトナムで2年半従軍したのであったが、その間の経験が、彼の心に深い傷を負わせた。「あの、戦地でね、もう今日死ぬか、明日死ぬかっていう毎日を味わったんでしょね。（帰ってきてからは）もう、妻も妻とも思わない。今日幸せならば、自分のやりたいことをやって、飲むだけ飲んで、それで今日一日が満足なら、もう明日は信じない。そういう人間になっちゃったんです。」

ベトナムへは、最初一年行ったあと一度戻りまた行った。そこで見たのは、「戦場なんですね。一つの船に6人乗ってたんですね。（ベトナムに）行くとき、私がまっさらな数珠を持たせたのね。そのお数珠が、帰ってきたときには、ふにゃふにゃになっていた。だから、やっぱり自分で題目を上げてたんでしょね。なぜかって言ったら、目の前でゲリラにアタックされて、一人は首が飛んだ、目の前で。一人が左手を刎ねられて、一人が脚を取られちゃって、片方の脚を取られて。一人が胴から、脚と胴がバラバラになっちゃって、自分だけが、かすり傷だった。」

まるで阿鼻叫喚地獄を見るような、凄まじい戦場をくぐり抜け帰還した夫は、すっかり別の人格に豹変してしまっていた。「私はもう思い出すのも嫌なんですよ。お医者さんにかかっても、もう戻らない。心の痛手が。それで1973年に離婚しました。」

「だから、先生が『戦争ほど残酷なものはない』とおっしゃるのを聞いて、本当にそうだと思ったんですよ。人間を変えてしまうって。先生は『だから、平和を叫ぶんだ』って。それは私も本当に体験済みっていうんですかね。先生のお言葉が、よく分かります。それで、73年に離婚して、もう絶対結婚しないって。もう恐ろしいって。また結婚したら、またどっか戦地行くとかね。また同じようなこと、もうそういう思いしたくない。それで一人でずーっと過ご

²¹ 正本堂の「内部の大空間には柱がない。構造表現主義は、構造を表現の要とするデザインをいう。近代建築は装飾を否定し、構造を正直に見せることに美を見出したが、正本堂はこうしたデザインの系譜にある」(五十嵐太郎 2001:185-6)。また五十嵐は、正本堂が構造表現主義の建造物として代々木国立競技場に比肩するものだとも述べている(2001:186)。

すって思いました。」

もう結婚はしないと思った E さんであったが、その後再婚した。離婚の7年後にハワイの NSA の責任者からお見合いを強く勧められ、日系三世の園芸業を営むメンバーと結婚し今日に至っている。再婚はおろか見合いにもあまり乗り気でなかった E さんの翻意を促したのは、NSA のメンバーの熱意と周到な作戦によってであったという。

E さんが最終的にお見合いすることにしたのは、責任者の「まだ 40 にもならないのに、独り身でいることはない」という言葉より、「あなたは今、人の上に立つ身だよ。だれか、こういう夫婦関係で悩んでます。どうしたらいいかって尋ねられたときに、独り身でどうして夫婦関係のことが激励できるのか」と言われ、題目を上げに上げ、考えに考え決断したのだという。

4. アメリカで生きる

それでは、E さんにとって、信仰はどのような意味があるのだろうか。私たちは、E さんの人生のなかで、その実践によって産み出されたご利益や功德を見出すことができるだろう。E さんは、ハワイにおいても勤行・唱題を継続し、また下種^{げしゅ}²²や折伏をはじめ組織での活動に邁進した。それらの信心の基底に、日蓮仏法の特色である非常に強い現世肯定的な性格があることがうかがえる。「祈りとして叶わざるなしの御本尊」とは、まさにその象徴である。

E さんの強い確信に支えられた信心は、身一つで異郷において生きるために、きわめて力強い助けとなったはずである。E さんはけっしてひとり孤独に異郷にあったわけではなかった。信仰によって結ばれた同志たちの緊密なネットワークとその「激励」とともにいつもあった。日本時代も女子部での活動によって、E さんの信心はより強固なものとなったし、ハワイに渡航後も婦人部を中心に E さんの活動は途切れることなく継続したのである。

さて、E さんがそうであったように、戦争花嫁が日蓮仏法を海外へと伝えたことの意義をもうすこし考えてみたい。1960 年の池田会長の訪米のときに結成されたアメリカ総支部の世帯数が 300 であり、その大部分が戦争花嫁として渡米した女性たちの世帯であったことはすでに述べた。

このことは単純な事実以上の重要な意義がある。つまり、SGI が今日のように日本宗教の枠をこえ、日系人以外にも広く受容された最初の要因として、国際結婚をした戦争花嫁の存在が重要なのである。彼女らによって日蓮仏法は、海を超えると同時に、国境と民族を越えたからである。

つまり、彼女たちのアメリカ人の夫が、“I do it for you.” と言いながら、最

²² 下種とは、種を下ろすこと、つまり、人々に成仏の因となる妙法を初めて説き聞かせることをいう（聖教新聞 2013/8/4 p.6）。

初は妻の機嫌をとるために、自分たちになじみのない信仰に目をつぶり、しぶしぶ自分自身も唱題・勤行を始めたことが報告されている²³。このとき、国際結婚によって生まれた家庭のなかで、日蓮仏法は国境と民族を越える第一歩を踏み出したということになる。

アメリカ合衆国におけるエスニック・グループと宗教への帰属はかなりの程度一定したパターンが見られる。そしてそれは、社会階層とも一致する傾向が存在する。このような成層化された宗教所属のパターンに日蓮仏法が風穴をあけたことが非常に重要なのである。

また、SGIはゆっくりと国境や民族を越えたのではない。いっきよに越えたのである。後述するように、もちろん布教の核として日本人と日系人は重要な役割を演じたが、創価学会は海外に出た最初から、国境と民族を越えたのである²⁴。

私たちがインタビューした5人の戦争花嫁の夫の民族的な背景を見ても、ドイツ系・日系三世・フィリピン系（ハワイで出生）・その他の白人が2人となっていてじつに多様である。この点において、SGI以前にも多くの日本宗教が海を渡っているが、それらが日系人のエスニック・チャーチ²⁵に留まったことと非常に対照的である。

戦争花嫁への布教が、アメリカへの広布（広宣流布）戦略としてどこまではっきりと意図されたものであったのか、私たちは確たる裏付けを得ていない。しかし、その発端はおそらく漠たるものであったとしても、ある時期からはかなりはっきりと意識されたと思われる。

すでに戸田城聖が早い時期から海外への広布の意欲をもっていたこと、そして、それに池田が明確な形を与えたことは先に述べたとおりである。その時代、1960年代半ばまでは一般人は自由に海外渡航できなかったなかで、累計4万人以上にも達した戦争花嫁の存在に目を向けたのは自然なことであったということだろう。

さらにまた、日米の狭間で偏見と差別に苦しむ戦争花嫁の消息が伝わったことも、池田の決断を促したのではないだろうか。この間の事情について、1972年に出版された当時のNSA（Nichiren Shoshu of America）²⁶についてのルポルタージュのなかに、池田の声が残されている。「会長に就任してまず最初になにをやろうとしたか」という問に答えて、「国内で入信して、アメリカに散っていった婦人メンバーがいることを私は知っていました。気の毒な境涯のひとが多かったようです……“いずれの日にかかならず行くから待っていてほしい”

²³ 井上 1985:152-4・中野 1985:45

²⁴ 秋庭・川端 2008:168-173

²⁵ エスニック・チャーチとは、一民族のメンバーのみからなる教会ということ。アメリカ合衆国の多くの教会はエスニック・チャーチである（堀内一史 2010）。

²⁶ 当時はNSAの名称が用いられた。SGIが用いられるようになったのは1991年の宗門との決別以降である。

といつも気にしていたのです……だから会長に就任して…まずアメリカに行こうと決意しました」と述べている²⁷。

池田は「まず行こうと決意し」たアメリカで、望郷の念に駆られる戦争花嫁たちに三つの指針を与えた。日本を離れる前には想像もしていなかった困難に耐えながら、しかし、いかに日本に帰還しようかと思案を重ねていた彼女たちに、池田の言葉は強い衝撃を与えたという。

三指針は10月4日のサンフランシスコでの座談会において発表された。それは(1)市民権を取り、良きアメリカ市民となること、(2)自動車の運転免許を取ること、(3)英語をマスターすることの三つであった²⁸。つまり、要約すれば、普通のアメリカ人になりなさいという指導である。アメリカ社会に根付いて生きよというこの指針は、日本恋しと訴える彼女らの想像すらしないものだった。

それから半世紀以上、三指針にしたがってロサンゼルスを生き抜いた戦争花嫁の一人にインタビューを行なった。KEさんは、1929(昭和4)年、東京生まれで埼玉で育つ。看護婦だった1953年、埼玉の朝霞キャンプに勤務するE氏と知り合う。信心は1954年、最初に母が友人より折伏され始めた。母と妹の病気が回復するのを間近で見てKさんも題目を上げるようになった²⁹。以下では、Kさんの口調も再現しながら、その半生を紹介しよう。

1957年に日本で結婚したが、アメリカに転勤になっていたE氏と1年間ほどは別れて暮らした。プロペラの米軍機に乗って立川基地からアメリカに旅立ったのは、1958年4月に戸田城聖の葬儀が営まれた、その年の6月のことだった。Kさんは、E氏と別れて住む間に出席した、大石寺での質問会のときの戸田城聖のベランメエな口調と明快な応答をよく覚えている。私の夫はアメリカ人ですと言うと500人がいっせいにKさんを注視したが、題目さえ上げれば、アメリカも日本も変わることはないというのが戸田の答えだった。それで、アメリカでもがんばってみようと思った。

最初はロサンゼルスにいたE氏の伯父のところに居候したが、英語が分からなかった。パンばかりでご飯も食べたかったのだが、riceと発音できなかったので伯母さんに伝わらなかった。聞きかじって覚えただけの英語だから、前置詞など使うことができず単語と単語を並べただけだった。そんなわけで1960年ころまではアメリカ人は折伏できなかったが、日本語のできる人を10人くらいを折伏した。ジャパン・タウンに行くと髪の毛の黒い人を捕まえて、片っ端から声をかけたのだった。

アメリカに着いて半年後の12月からロスの日本人病院に勤務し、夫を養っ

²⁷ 央忠邦・浅野秀満 1972:73

²⁸ 三代会長年譜編纂委員会編 2005:27

²⁹ KEさんへのインタビューは、2007年2月17日ロサンゼルスSGIプラザで実施した。また、Kさんの事跡は、江成常夫(1981:93-6 および 2000:60-1)でも紹介されている。

た。夫は8年間軍務に服するともらえる奨学金を得て³⁰、UCLAで放送技術を学んで大学院まで修了した。Kさんは自分に学歴がなかったのが、なんとしても夫を大学に行かせたかった。それでも、生活は苦しく大変だったが歯を食いしばりがんばった。アメリカは決して豊かな国じゃない。働かざるもの食うべからずは日本と同じだと思ったという。

必死で働いたが、その甲斐はあった。卒業式にE氏の両親がワシントン州から駆けつけて来て、Kさんはたいへん感謝された。結婚には反対されたが、「よくヘルプしてくれて、ありがとう。」と言われた。また、Kさん自身も40歳を過ぎてからサンディエゴのハイスクールに通った。仕事の合間であったので、卒業には7年を要したという。

1960年に、池田先生がアメリカに来られたとき、ほんとうに嬉しかった。頼るものがまったくないアメリカで、組織もでき、芯ができたように、頼ることができるものができた。ほんとうに安心できるという確信が得られた。

アメリカに来てしばらく経つと、アメリカとはなんと人情の薄い国で、自分中心な人ばかりで、家族のあり方も日本とずいぶんちがうと思った。ここで一生過ごすより、日本に帰りたいたいと思う人も多かったはずである。自分もへそくりをつくり、早く日本に帰りたかった。ここでは、そもそも言葉もできないから、腹を割って話せない。家でも言いたいことも十分言えない。多くの人がいづれ帰りたいたい、みな同じ気持だったのではないだろうか。

そう思っていたとき池田先生が来られた。英語を勉強しなさい、運転免許も、そして市民権も取りなさいと言われた。そして、さらに、よいアメリカ人になりなさいと言われたが、誰もそんなことは思ってもいなかった。

しかし、考えてみれば、ジャパ・タウンばかりにいれば困らないけど、日系人の一世は英語ができないから孫とも話せない。そして、街を一步出れば困ることばかりだ。ロサンゼルスでは車は靴代わりなわけだが、そもそも運転免許も英語が読み書きできないと取るのは難しい。

でも、池田先生がそう言われたのだから、チャレンジしようと思った。そして、一度チャレンジしようと思うと希望がでてきた。しかし、運転免許試験の英語もスラスラと読めるわけでないから、予想した問題の答えをあらかじめ覚えておいて、それと同じ問題が出るようにと、御本尊様に願った。そうしたら同じ問題が出て受かった。

1961年に免許がとれたので、組織の地区部長だったMKさんから、1953年型の元ポンティアックだった車を75ドルで売ってもらった。青い車だったので「青くん」と名付けた。その当時、まあまあの人のお給料は月100ドルくらいだったから、青くんは格安だった。青くんが元ポンティアックである理由は、MKさんは自動車の整備工場をしていたが、整備というより再生に近い仕事ぶ

³⁰ 復員兵援護法 (G.I. Bill) による復員軍人奨学金のこと。

りだった。だから、青くんはもともとはポンティアックだったけど、ありとあらゆるメーカーのパーツが組み付けられていて、元ポンティアックというしかなかった。

青くんは平坦なロサンゼルスのない坂を登るときに止まりそうになったり、ラジエーターの水がすぐなくなるのでいつも水を携行しなければならなかったが、あとで振り返れば青くんが故障したのは、2年間で2回パンクしただけだった。青くん、あっちこっちを走ってメンバーを激励に行った。青くんは、2年後にメンバーのアメリカ青年に100ドルで売った。

Kさんは24時間を信心に時間を捧げ、戦い、がんばってきたという。夫は、いつも優しく、車のガソリンは満タンになっているかと確認してから、いつでもしゃいど活動に送り出してくれた。しかし、70年ころに組織の活動が非常に多忙になったとき、「ぼくは、奥さんがほしかったのに、お寺の尼さんはいらぬ」と言われ、「別れよう」と言われた。それでも、「冬は必ず春になる」³¹と信じてやってきた。今は二人でいっしょに勤行しているという。

英語は、座談会に出て組織の活動に走り回っているうちにできるようになった。アメリカ人は、私のきちんとしていない英語でも聞いてくれるし、まちがってれば直してもくれる。それでも私の英語はちょっとヘンだったのだけど、それがまた個性的だと非常に受けた。64年にはハリウッドのChapter Leaderになったが、皆に話していると、あなたの語り口は本当に面白いと場がたいへん盛り上がった。

最初は経本もなかったのど、勤行は口伝えでゆっくり教えた。すぐに覚える人もいれば、なかなかの人もいるが、三ヶ月もすれば日本人より上手くなるアメリカ人もいる。だんだん分かってきたのは、人間だから、アメリカ人も同じ悩みをもっているし、同じ夢をもっているという当たり前のことだ。

池田先生がよく「人間教」と言っているが、まさにそのとおりだと思う。祈りに変わりはない。私たちは皆わが身の幸せ、そして、皆の幸せを祈っている。一人の人の幸せが、皆の幸せだから、私たちは世界平和を祈っている。

Kさんは、1989年から92年まで全米婦人部長を務めている。90年代初頭は、SGI-USAにとって非常に重要な時期にあたる、このときKさんは、いわゆる四者（組織）の一つである婦人部のトップを務めている³²。

³¹ 御書 1153

³² 創価学会には、壮年部・婦人部・青年部・男子部・女子部のいわゆる四者組織が特徴的である（青年部は、男子部と女子部からなるので五者とは言わない）。アメリカ合衆国においても、これら四者は導入され基本的に維持されている。四者は、性別と年齢階梯という、伝統的な日本文化においては違和感の少ない原理に基づいて構成されているが、アメリカ合衆国においてはこれらは非常に特異な組織原理である点は注意が必要である。この点については後述する。

5. 二世と出会う

Kさんが、池田会長の最初のアメリカ指導の三指針に触発され、一念奮起し運転免許を取得し、広布の足となる青くんを地区部長だったMKさんから購入したことはすでに紹介した。MKさんあつての青くんなのであったが、ではMKさんとはどのような方であったのか、その興味深いプロフィールを紹介しよう³³。日蓮仏法がアメリカ合衆国に定着するために、MKさんのような日系二世の貢献は非常に重要であった。

MKさんは1961年、地区部長に任命されたのであったが、じつはそれは、ひとえに自動車を持っていたからなのであるという。そのとき支部長に任命されたTさんは、さらによい車を持っていたので支部長に任命されたのだという。MKさんは自動車整備工場をやっていたので、ボロだったが車があり、それで、おまえ、支部長をやれということになったのだという。

しかし、MKさんはこの任命を二つ返事で引き受けられない事情があった。じつは日本語がよく分からなかった。日常会話も怪しいかぎりだったが、御書や法華経や仏法については皆目とっていいほど分からなかった。勤行は耳で覚えてだけで経本は読めなかった。勤行のとき経本を逆さまに持っていて注意されたことも、MKさんを紹介するエピソードとして有名な話だという。それでも最後はこの任命を受けたのであるが、日本人は大事なトピックスについて言葉づかいのミスを微塵も許さないことが、MKさんを非常に尻込みさせた。

MKさんは、1927年ロサンゼルスで生まれ、北カリフォルニア・ローダイで育った日系二世である。MKさんの一家は、第二次大戦が始まるまでローダイで農業を営んでいた。

第二次大戦が始まるまでというのは、戦争が始まると、日系人強制収容所に入れられてしまったからである。収容所は最初ローダイに近いところだったが、そのあとでおおよそ2000マイルも離れたアーカンソー州の収容所に行くことになった。その時分、ぼくは子供だったから、収容所での生活は辛いとも思わなかったとMKさんは語っているが、はたして本当はどうだったのだろうか。

MKさんは11人兄弟の4番目。1男10女。自分以外は女ばかりだった。収容所を出て一家で戦後をどう生き延びていくか考えると、父と母はさぞ心細かったはずだとMKさんは振り返っている。

辛かったのは、戦争が終わり収容所を出てからだという。収容所で4年間を過ごし、収容所を出た後はアーカンソー州の州都のリトルロックでさらに4年間、一家で働きお金をつくりやつのことでローダイに戻ってきた。この時代、日本人の農業の手腕には定評があり農場での働き口があった。ローダイまで戻ってお金が貯まるまで野菜を作った。

アーカンソーからローダイに帰るとき、2000マイルもあるわけだけど、ガ

³³ MKさんへのインタビューは、2006年6月27日ロサンゼルスでのSGIプラザで実施した。

ソリンを入れたくとも日本人だと思われると知らん顔をして売ってくれない。2000 マイルといえば青森から山口を往復するよりも距離があるわけで、タイヤも何度もパンクしたが、買いに行っても、在庫があっても売ってくれない。あの当時はまだなんといっても、ほんの昨日まで敵国人だったわけだからそういうこともあったと、MKさんは語っている。

ローダイに戻ったあとも MKさんは農業に従事したが、一生農園働きでは将来性がないと思って、一人で家を出てロサンゼルスに来た。ローダイでは日本人には農園で働く以外に仕事はなかった。農園働きではどんなことにでもハイハイと頭を下げて月給もらって、その僅かな月給で生活を立てているわけだけど、だんだん成長し大人になっていくにつれ、自分は父親たち一世と同じことをしたくないと考えた。

こうしてロサンゼルスに来た。ロスは大都会だから農業以外の他の仕事があったわけだが、しかし、この当時日本人は弁護士になるとか医者になるとか、そういう大きな夢は持ちようがなかった。だから、他に使ってもらえるところがなかったの、結局、自動車のメカニックになった。

日本人は、今でもそういう評判があるわけだが、手先が器用だという評価は当時からあってそれでガレージで働けることになったと思う。そもそも農業でも日本人が使ってもらえたのは、この手先が器用だという評判によるものだったという。メカニックといっても、あの時代の車は技術がたいして進んでないので、ガレージの掃除をしたりしているうちに、見よう見まねでいろいろできるようになった。

ガレージで働き出してもやっぱり月給は少なかったのだが、ロスで過ごすうちどんどんと金儲けの欲が出てきた。それで、ただ整備するだけでなく、事故車の再生もするようになった。この方がただ整備するよりも何倍も儲かった。Kさんの青くんも、おそらくこのように MKさんが蘇らせた一台だったのだろう。

MKさんは、1952年から53年まで朝鮮戦争に従軍している。じつは家出同然でロスに行き、しばらくはグレていたそう。だ。「墮落の生活に落ちた」のだという。それならば、流れ弾にでも当たって戦争でポッキリ行ったほうがマシかと思って、「つまらん漫画のような考え方で」志願して朝鮮戦争へ行った。

ところが、1953年に52歳の若さで父親が急逝してしまう。それで残された家族が赤十字を通じ一人息子を戻してくれと要請し、それで MKさんはロスに帰ってきた。姉は嫁いでいたが、母親と妹が7人いてその面倒を見なければならなかった。家族もローダイを引き上げ皆がロスで暮らすことになった。

これだけの大家族を養うために MKさんは一計を案じた。このころロスの日本人の多くはイースト・ロサンゼルスに住んでいたが、MKさんはウエスト・ロサンゼルスで働くことにした。現在ではだいぶ様変わりし、ロサンゼルスも郊外へ発展し街がどんどん広がりその街区の特徴もまた変化したが、この時代

は白人が多く居住し裕福なウエストと、日系人やヒスパニックあるいはアフリカ系など非白人系が多く低階層のイーストという対照がくっきりしていた。

MKさんは、無理してでもウエスト・ロサンゼルスで働くことにした。低所得層ばかりが住んでいるところで営んでいる商売は、それこそ貧しい人は給料も何もかも安いわけだから、そのエリアの商売が扱うものもなんでも安い物ばかりになる。反対に、生活の程度の良い所に行けば、車ひとつを直すにしてもそれだけ儲けも大きいというわけで、それでウエストサイドで働くようにした。

MKさんは1956年に結婚している。東京で生まれ育った奥さんはMKさんとは再婚である。奥さんのTさんは、戦争花嫁としては早い時代にアメリカに来たのだが、夫と死別し食堂で働いていたときMKさんと知り合った。Tさんは日本で信心を始め、アメリカに来てからも継続していた。

MKさんはTさんに折伏され題目を上げるようになったが、それは一言でいえばTさんのご機嫌をとるためだった。MKさんの信仰に対する気持ちが一転したのは、1960年に池田先生をお迎えしたことが大きな転機となった。それはひとつには、池田先生をお迎えし組織が結成され同志がまとまり、初めて多くの同志と出会ってこの信心が素晴らしいという確信が得られたこと。そして、それに非常に感激したこと。またこのとき後にNSAの初代理事長となるジョージ・ウィリアムス George M. Williams と「アメリカ広布の礎をつくる」と意気投合したことも、一生懸命信心をしていこうと決意した大きな理由であったという。

このときは会員のほとんどが日本人で、しかもその大部分が女性であることはすでに紹介したが、会合は当然日本語中心であった。MKさんは1961年に地区部長に任命されたこともすでに述べたが、それで、MKさんが日本語を覚えたのは、日本語で行われていた会合と、夫婦喧嘩を通じてであるという。英語で喧嘩したのではTさんは何を言われているのか分からない。ほめてもらっているのか、怒られているのかもよく分からなかったから、夫婦喧嘩するためにも日本語を習得するよう努力したのだという。

多くは軍人であったアメリカ人の夫たちは、座談会や他の会合もすべて日本語だったので、車で奥さんを連れて来ると、会合が終わるまで外で待っていて、会合が終わったらまた連れて帰るだけのドライバー役にすぎなかった。MKさんも最初はたんなるドライバーの一人だったのだが、池田先生にお会いした後から本格的な信心のための努力を始めた。

その努力とは、まだ英語で書かれた信心の素材がほとんどなかったこのとき、日蓮仏法をいわば身体で翻訳することに努めた。その努力によって、経本も聖教新聞も日本語が一文字も読めない、大聖人のこともさっぱり分からない、そういうMKさんが、このあと「励ましの達人」と呼ばれるようになる。

身体で翻訳するとは、いったいどのように達成される翻訳なのだろうか。それは、MKさんの半生の経験から産み出されたコミュニケーションのスタイル

であった。日系二世として生まれた MK さんは英語を母語として生育しているが、家庭における言語環境は少し混みいった事情があった。

つまり、日本人の母親は英語を話すことができなかった。母が日本語しか理解できなかったのも、MK さんも姉妹も日本語で育てられている。家では日本語に囲まれて育ったので、幼年期は日本語を話すことができた。それが学校に行くにしたがって、しだいに日本語が話せなくなってしまったのだという。英語しか話せなくなった後は、母親にも英語で話しかけた。つまり、英語が話せない母親は子どもたちに日本語で話しかけ、日本語が話せない子どもたちが英語で答えるという形でコミュニケーションが営まれたのである。

親密な親子の間であればそのような仕方でも充分コミュニケーションがとれたという記憶が、MK さんに蘇った。つまり、心が通じていれば、母の日本語に英語で答えても、母親にも英語で理解してもらえたという記憶と確信があったから、アメリカ広布の礎をつくるために、信心の第一線の現場においてこれと同様なことをすればよいのだと考えたのである。

またこれは、池田会長の「アメリカは、アメリカの人材を育てる以外ない」という言葉に鼓吹され、自分にできることをしようと思ったのだという。このころ日本人の婦人部の皆さんはある程度御書も読めたけれども、その理解したところをアメリカ人に分かるように英語では説明ができなかった。反対に、御書も聖教新聞も一文字も読めない自分であるけれど、また会合で話されていることは日本人の理解そのままに正確ではないかもしれないが、概略は分かるのだから、それをアメリカ人に説明してみようと思ったのだという。

このころ東京から届くブックレットなどがたまにあっても、御書や大聖人についてあまりに直訳すぎて、日本の歴史や文化伝統に疎遠なふつうのアメリカ人にはさっぱり分からない翻訳が多かった。MK さんは、アメリカに信心を最初に伝えた日本人女性の言葉を通訳すると同時に、日蓮仏法をアメリカ人に分かるような英語に翻訳し説明した。アメリカ人の耳で聞き、アメリカ人に分かる英語表現に置き換えて信心を説明したのである。

MK さんが、会合、家庭訪問、個人指導に熱意をもって取り組むなかでしだいに組織は発展していく。1963 年 1 月に、この当時アメリカ最大の日系人コミュニティとして有名なリトル・トーキョーに近いイースト・ロサンゼルスに、ロサンゼルス会館が設置される。これ以前は個人宅で会合が行われていたが、会館は椅子なしで約 100 人ほどを収容できる仏間を備えていた。また会館に隣接する建物は聖教新聞ロサンゼルス支局がおかれた³⁴。そして、この年の 5 月からロサンゼルス会館で英語による座談会が行われるようになった³⁵。

なお、MK さんは 1966 年に NSA の専任職員になっている。また 1980 年に

³⁴ 三代会長年譜編纂委員会編 2005:131。聖教新聞ロサンゼルス支局の設置は、1963 年 2 月。

³⁵ 英語のみで座談会が行われるようになるのは 1967 年からである。

は副理事長に就任している。後に述べるように 1980 年に NSA は大きな転換期を迎え組織を再編する。そのとき副理事長が 5 人選任されるが、MK さん以外の 3 人も、言語的には英語をベースとする日系二世であった。日本語よりも英語に堪能な、しかし同時に、日本の文化伝統や組織原理を斟酌できる能力を備えたこれらの人材が中核において変革期の NSA を支え、日本の伝統に深く根ざした日蓮仏法を翻訳し、その教えをアメリカ化するのに大きな役割を果たしたのである。

6. 60 年代における組織の発展—日本とアメリカ

この当時の組織や機構の発展について概略を整理しておこう。

英語による出版物は、1960 年 10 月の池田会長の初めてのアメリカ訪問に際し海外への紹介書として“*The Soka Gakkai*”が編まれたが、その後しだいに増加する³⁶。1962 年 5 月 15 日に英字新聞“*The Seikyo News*”が創刊される。タブロイド判 4 ページで、1 日と 15 日の月 2 回刊だった³⁷。1963 年 1 月には英字パンフレットの“*The Seikyo Journal*”の 3 巻が刊行される³⁸。

日蓮の遺文である御書や法華経、あるいは聖教新聞や大百蓮華、さらには戸田や池田の著作の英語への翻訳が進むにつれ、アメリカにおいて日蓮仏法を伝える媒体が豊富化していく。それは 1964 年 8 月 15 日に創刊された“*World Tribune*”とその翌年に刊行された“*Seikyo Times*”に随時掲載されることによって本格化していった³⁹。出版物の充実するプロセスとその詳細については機会を改めて取り上げることにする。

組織もしだいに拡充され、1961 年 8 月にサンフランシスコ支部・シカゴ支部・ワシントン支部と、北米で 23 地区が結成されている。この年の 11 月にはアメリカ総支部の 68 人が日本で初の研修を実施し、大石寺へ登山も行われた。これが全米からの初登山であった⁴⁰。

³⁶ 私は、この 1960 年の初版は未見。1966 年に増補改訂新版の“*The Nichiren Shoshu Sokagakkai*”は、6 章からなり、創価学会の概略と歴史、仏教の歴史、日蓮大聖人の教え、池田会長の講義、折伏の手引、質疑応答からなっている。全体で 217 ページとかなり大部であり、初版から相当増補されていると思われるが、それでも初の英語の出版の初版で何を伝えようとしたのかその構成から想像できる。

³⁷ 1963 年 5 月 3 日に週刊となる。

³⁸ これは A6 判、14 ページで、第 1 巻「創価学会とは」、第 2 巻「創価学会の歴史」、第 3 巻「学会員の活動」からなる。三代会長年譜編纂委員会編 2005:130。

³⁹ “*World Tribune*”はタブロイド判、創刊時は月 2 回刊、英語 4 頁、日本語 2 頁だった。1965 年 4 月より週刊になる。また 8 月からは週 3 回刊となる。“*Seikyo Times*”は月刊で、1965 年 1 月 1 日の創刊。最初の御書の翻訳は、“*Seikyo Times*”1966 年 7 月号に掲載された「経王殿御返事」である。

⁴⁰ 登山とは、この時代は本山であった富士大石寺への参詣のこと。三代会長年譜

1963年1月、池田会長は海外メンバーの激励と、「広宣流布のために、十年、三十年、百年先の揺るがぬ礎をつくるため」に、アメリカ、フランス、スイス、イタリア、レバノン、タイ、香港を訪問する⁴¹。

この旅の最初の訪問地は、初訪問から2年3カ月ぶりのホノルルであった。ハワイでは約300世帯にメンバーも増加し、ハワイ支部が結成された(8日)。この後、ロサンゼルスに移動し、先にも述べたように、ロサンゼルス会館の開設が告げられたアメリカ総支部西部総会(12日)に出席する。翌日、アメリカ6番目の支部となるニューヨーク支部結成大会としてアメリカ総支部東部総会が開催され、池田は「広布のニューフロンティア精神の火を赤々と燃やして」いこうと挨拶している⁴²。このときの訪問で準備を整え、5月25日に法人格を取得し、アメリカ創価学会“Soka Gakkai of America”となった。

8月にシカゴで開催された第1回のアメリカ総支部総会についてはすでに述べたが、このとき欧米本部が設置され、アメリカ総支部は東西に二分割されアメリカ東、アメリカ西の両総支部が結成された。欧米本部には、アメリカの二総支部と南米総支部、ヨーロッパ総支部の計四総支部が所属するようになり。北米では、サンディエゴ支部、コロラド支部、ケンタッキー支部が新設された。

また、この総会においてアメリカ総支部長に貞永昌靖が任命された。1960年にアメリカ総支部がおかれたとき、総支部長は日本在住の北條浩(後に第四代創価学会会長)が就き、貞永は、総支部幹事と北米男子部隊長 YMD Leader を兼任した。貞永は1957年に渡米して以来、アメリカの広布を実質的にリードし、1993年に引退するまで NSA=SGI-USA の初代理事長 General Director を長く務めることになる。貞永は、1971年にアメリカ市民権を取得し、George M. Williams と名乗る⁴³。その事跡についてはまた別の機会に詳しく検討する。

しばらくアメリカから目を転じ、当時の日本の創価学会の状況を概観しよう。このころは創価学会本体においても重要な時期にあたる。

1964年4月1日富士大石寺において大客殿が落成する。その落成慶讃大法要において、池田は法華講総講頭に任ぜられ、創価学会会長として「時來るの感を深くするとともに、団結を強めて広布達成を誓い合いたい」と挨拶し、この年は「団結の年」と命名されている。

翌2日、戸田城聖の七回忌が、落成したばかりの大客殿において営まれる。そこで池田は、この日を期して学会が“本門の時代”に入ったとを述べ、「“本門の時代”とは、化儀の広宣流布の総仕上げの時代であり、一人ひとり社会の第一線に立っていく時である」と締めくくった⁴⁴。

編纂委員会編 2005:71。

41 三代会長年譜編纂委員会編 2005:129

42 三代会長年譜編纂委員会編 2005:132-3。ニューヨーク支部に続きシアトル支部も結成(19日)。

43 井上順孝 1985:161

44 三代会長年譜編纂委員会編 2005:184

大客殿は、戸田が生前最後に大石寺に寄進した大講堂⁴⁵とともに、後に正本堂も手がける横山公男の、その正本堂を予告するような伝統的な寺院のイメージにとらわれないモダン建築であった。大客殿は日本建築学会賞と建築業協会賞に輝いている。大客殿の建築資材の調達には池田自身も世界各地に足を運んだこともすでに述べた。そして、その完成は池田の会長就任時より念願の一つであった⁴⁶。

この年が重要なのは、たんに大客殿が落成したからではない。大客殿は強い上昇気流に乗っていっそう高度を増す、そういう時代の創価学会のシンボルとして見るべきであろう。

つまり、この年には、包括する会員数が500万世帯に迫り、それは池田の会長就任時からゆうに三倍以上に達したのであり⁴⁷、以下で述べるような創価学会の歴史のなかでも特記すべき事項が後に続いた。時代はときあたかも高度経済成長の頂点にあり、東京オリンピックの開催に日本国中が沸き立つ高揚感のただ中であつた。そういう時代背景のなかで“本門の時代”に入ったと、池田は宣したのである。

戸田の七回忌法要の日から、「三百万総登山」が開始され、これは、翌年3月25日まで継続し、1日平均で12,000人近くが登山するという空前の規模のものであつた。アメリカからも多くの会員が三百万総登山に参加している。アメリカ総本部の第一陣の126人が、総登山の開始とともに参加し、アメリカからは計8回にわたる参加があり、参加者の総計はおよそ1,200名にも達した。池田は、アメリカ以外の国外からも相次いで来日する総登山への参加者を丹念に激励した。

大客殿の落成に続く4月20日の第48回4月度本部幹部会において、日本国内の組織拡大が発表されるとともに、欧米本部が分割されアメリカ本部とヨーロッパ本部がそれぞれ独立し、あらたに東南アジア本部も新設された⁴⁸。

さらに5月3日の第27回本部総会において、日本国内と海外ともさらに組織が拡大された。この時代、創価学会の教勢の伸長がいかに急ピッチで進んだのか想像することができる。海外組織は、アメリカ、南米、ヨーロッパ、東南アジア、沖縄の5本部となった。このときの本部総会に海外から600名の参加があり、そこにはアメリカ本部からの136人も含まれていた⁴⁹。

⁴⁵ 戸田の最晩年の1958年3月1日落成慶讃大法要が営まれる。

⁴⁶ 池田は1960年5月3日の第三代会長就任式において、戸田の七回忌までに300万世帯の達成と大客殿の建立などの方針を発表した（三代会長年譜編纂委員会編2003:842）。

⁴⁷ 3月度の折伏成果の発表では、総世帯数は431万2千世帯あまりとなっている（三代会長年譜編纂委員会編2005:183）。

⁴⁸ このとき日本国内では、総合本部1、地方本部8、総支部32、支部192がいきよに新設され、全国で総合本部2、地方本部42、総支部160、支部856となっている（三代会長年譜編纂委員会編2005:186）。

⁴⁹ 三代会長年譜編纂委員会編2005:187

この「本門の時代」の開幕を告げる本部総会において、翌年の 1965（昭和 40）年から始まる“第六の鐘”の次の七年間の目標として、池田は以下の四項目を発表した⁵⁰。それは、その後の創価学会の目標を明確に刻む非常に重要な決定であった。①大石寺に正本堂を建立、寄進する⁵¹。②六百万世帯を完遂し、正本堂建立のときに六百万総登山を実施する。③第三文明の大牙城として、信濃町に「創価文化会館」を建設する。さらに、二、三年の間に大都市には教会館を、また、すべての県に、最低一会館を設置する。④文化局政治部を解散し、創価学会は、公明政治連盟の支持団体として、その活躍を見守っていくことを決定し、また政治活動については、日本国内のみで行い、海外では一切行わないことを確認した。以上の四項目である。

上記にくわえ、6月30日の第7回学生部総会の席上、池田は創価大学の設立構想を発表する。このとき学生部は5万人を達成したのであったが、台東体育館に結集した1万2千人の部員に向かって、「将来、“創価大学”を設置したい。その大学で、世界平和に寄与すべき大人材をつくりあげたい」と挨拶している。

なお、11月17日には、公明政治連盟は発展的に解消され、公明党が結成された。池田は結成大会に祝電を寄せ、その政策や方針など、一切を党の主体性に任せる。政策についてはただ一つ、中華人民共和国の正式承認と、日本は中国との国交回復に務めるべきことを提案した⁵²。

7. 時代の状況と呼応する

さて、1964年の日本における創価学会の動向をくわしく紹介したが、それはこの年以降、おそらく70年代後半までにおよぶ、創価学会の骨格と進路が定まっていっただからである。そして、それはアメリカの動向とも対応させて考えると⁵³、今日のSGIに到る道筋がよく理解できると思われる。

整理すれば、60年代の半ば、池田の日蓮正宗総講頭への就任、正本堂の建立と創価大学の設立構想の発表、公明党の結党、また、これ以降しばらく実質的に創価学会会員の第一の指針となった『人間革命』の聖教新聞への連載開始⁵⁴など、すべてがこの時期のことである。

⁵⁰ 「第6の鐘」とは、戸田が述べた「7つの鐘」構想の第6の鐘の意。1930年の創立以来、創価学会が7年を節目として大きな飛躍を遂げてきた歴史を踏まえ、7×7年後の1979年を広宣流布達成の年と定め、その日に向かって希望と勇気と確信をもって進もうと、1958年5月3日の第18回春季総会において池田は講演している。

⁵¹ 正本堂は、1972年10月に完成する。

⁵² 三代会長年譜編纂委員会編 2005:212

⁵³ SGI全体の発展を理解するには、例えばヨーロッパとアジアにおける展開も対応させてそれを鳥瞰しなければならないだろう。今後の課題としたい。

⁵⁴ 1964年12月2日、沖縄において執筆が開始され、聖教新聞への連載は翌年1

アメリカでは、法人格の取得、初の海外会館となったロサンゼルス会館の設置、第1回の全米総会の開催があり、組織も拡大していく⁵⁵。さらに World Tribune の創刊、英語による座談会の推進、ロサンゼルス近郊で海外初の日蓮正宗寺院となる妙法寺の起工などがほぼ同時期に進行する。

1966年秋に、創価学会は早くも目標の600万世帯を達成するが、その3月、池田は南北アメリカ指導に出立した。ロサンゼルス、ニューヨーク、リオデジャネイロ、サンパウロ、リマ、マイアミ、そして再びロサンゼルスを経て羽田に帰着した。このときサンパウロでは第2回南米文化祭が開催されている。南米でも着実に会員が増加していた。

池田は、帰路のロサンゼルスでアメリカ本部の西部方面の大幹部会に出席したが、そこで「アメリカは第二期の開拓時代に入った」と指導している⁵⁶。このときアメリカ本部は9総支部、36支部の体制となり、青年部も拡充し、男子は5部11部隊、女子は2部3部隊になった。

この年1月にはハワイ会館が、また5月にはシカゴ会館が開設している。8月にはニューヨークにおいて3,400人を結集し第3回の全米総会が開かれている。11月には World Tribune が創刊200号を達成した、12月には、Nichiren Shoshu of America (NSA) となっている。

1960年に開始されたアメリカでの創価学会の布教は、このころから新たな段階を迎えた。それは、これまでと比べ量的な拡大をみたのみならず、質的にもそれまでには経験したことない「第二期の開拓時代に入った」のである。

翌1967年にこれまで建立が進められていた海外寺院が相次いで落慶入仏する。5月13日ホノルルにおいて寂光山本誓寺の入仏式が営まれ、16日にはロス近郊エチワンダにおいて恵日山妙法寺が落慶する。1963年3月以来ハワイを皮切りに、宗門より僧侶が派遣され海外出張御授戒が行われたが⁵⁷、二寺の落慶によって日本と同様な体制となった。つまり、出家の聖職者からなる宗門と在家信徒集団である創価学会という二重構造である。アメリカにおいても、この二重構造は1991年1月の宗門との決裂まで継続した。なお、海外に寺院が置かれたのは、アメリカとブラジルのみである⁵⁸。他は随時の出張による御授戒で対応した。

さて、3,000人の会衆が集ったエチワンダ妙法寺の落慶入仏式において、池

月1日に開始された。単行本化され、全12巻が1993年に完結した。

⁵⁵ 1964年9月にはハリウッド支部、セントルイス支部が新設され、アメリカ本部は2総支部、13支部となっている。

⁵⁶ 三代会長年譜編纂委員会編 2005:283

⁵⁷ 出張御授戒は、1963年と1965年に実施された（三代会長年譜編纂委員会編 2005:138/140-1、ウィリアムス 1989:235）。

⁵⁸ アメリカでは、ロスの妙法寺、ハワイの本誓寺、ワシントンDCの妙宣寺、NYの妙説寺、シカゴの妙行寺の5カ寺が1981年までに落慶した。ブラジルでは、サンパウロの一乗寺が建立された（1968年）。

田は「アメリカ本部も、第二ラウンドの新しい時代に入った。アメリカ広布も本門の時代に入った」と挨拶し、アメリカ総合本部の新設も発表され、西部本部、東部本部、ハワイ本部の三本部体制となることが発表された⁵⁹。

アメリカにおいて、たしかに池田が「第二期の開拓時代」、あるいは「第二ラウンド」と述べるような状況が生まれていた。ひとつには会員数が急拡大しつつあったこと。そして、会員に占める日本人・日系人の比率が減少し過半数を割った⁶⁰。つまり、この時代 NSA は急速にアメリカ化に向かうのである。

1965 年では 8 割近くを占めた日本人・日系人が、1970 年には 3 割まで低下する⁶¹。1970 年には白人系会員が 4 割を越え、アフリカ系は 12%、ラテン・アメリカ系も 13% に達している。会員数は 1965 年から 1969 年にかけて、3 万人から 17 万人まで増加したと記した文献もある⁶²。これら急激に増加したアメリカ人のメンバーはそのまま定着したのではなかったが、1960 年代の後半、NSA には驚くほどの変化がみられるのである。

この急速な発展と変化は、1970 年に初代理事長に就任する貞永＝ウィリアムスの強力なリーダーシップのもと進められた、ストリート折伏 *street shakubuku* に代表される積極的な会員獲得戦略が功を奏した結果であると考えられることもできる。しかし、それとともに、あるいはそれ以上に、この時代のアメリカ合衆国がおかれていた社会状況との相互作用によるものであると考えられるはずだ。

この時代、アメリカ合衆国は大きく深く揺れていた。社会変化の大波に覆われていたのである。

1955 年南部アラバマ州モンゴメリーで、黒人女性ローザ・パークスは市バスの白人専用および優先座席に座ったが、白人のバス運転手は後から乗車してきた白人乗客へ席を譲るよう指示した。パークスがそれに従わなかったところ、彼女は人種分離法違反で逮捕・投獄され有罪判決を受ける。

これに抗議の声を上げたのが、マーチン・ルーサー・キング牧師であった。キング牧師の主導のもと、後にモンゴメリー・バス・ボイコットと呼ばれるバス乗車ボイコット運動が約一年間続けられ、これには黒人だけでなく多くの白人も賛同し参加をする。その結果、その翌年、合衆国最高裁判所はバス車内における人種分離を違憲とする判決を出す。そして、これ以降、南部諸州の他の多くの地域でも、反人種差別運動が大きく盛り上がることになる。

このように 60 年代へ入ると、黒人への人種差別の撤廃と公民権の適用を求める社会運動、つまり公民権運動が全米を覆う。公民権運動のクライマックス

⁵⁹ アメリカ統合本部長には貞永が就任、このとき貞永は日本の創価学会の副理事長にも就いている（ウィリアムス 1989:237、三代会長年譜編纂委員会編 2005:343）

⁶⁰ 川端 2010:41-3

⁶¹ Parks 1980:346

⁶² Parks 1980:340

は、1963年8月のワシントン大行進であった。リンカーン記念館前のワシントン記念塔前広場に結集した20万人の群衆を前にし、キング牧師は世に名高い「I Have a Dream 私には夢がある」と演説した。ワシントン大行進には黒人だけでなく白人の参加もあり、また多くの文化人や著名人も参加したように全米の広範な支持を集めた⁶³。

このような社会の動きと連動するように、民主党のジョン・F・ケネディ大統領は、南部諸州の人種隔離法を禁止する法案を次々に成立させた。しかし、1963年11月ケネディはテキサス州ダラスで凶弾に倒れてしまう。跡を継いだジョンソンは、公民権運動に強い理解を示し、公民権法の制定に向け努力する。その結果、世論も高まり議会の支持もあり、翌年に公民権法が制定される。このときアメリカ合衆国に永年存在した法律上の人種差別によりやく終止符が打たれたのである⁶⁴。

公民権運動の波が全米を揺り動かすのとちょうど同じ時期、ケネディ時代のアメリカは本格的にベトナム戦争に参戦する。そして、その状況は次第に泥沼化の様相を呈していく。結局、アメリカ軍は1973年にベトナムより撤退し、75年にサイゴンは陥落しベトナム戦争は終結するが、アメリカはこの戦争で、およそ5万8千人の戦死者と2千人の行方不明者を出すという大きな犠牲を払いながら得たものはほとんどなかった。ベトナム戦争はアメリカ合衆国に大きな傷を残した。

ベトナム戦争は、それ以前の戦争と異なってメディアが刻々とその状況を伝えた。カメラとペンが伝える戦場の悲惨と不条理が、故郷を遠く離れ縁もゆかりもないインドシナの地で、アメリカの若者はなぜ、何のために戦っているのかという問いを喚起した。その結果、かつて見たことのない規模の草の根反戦運動が盛り上がる。ベトナム戦争の最盛期の1968年には54万人ものアメリカ軍が南ベトナムに投入されたが、周到なゲリラ戦を展開する北ベトナム軍を打ち破ることはできなかった。遠い戦場で士気が低下し、国内外では反戦運動が高まる。

公民権運動とベトナム反戦運動は相互に転化し、また大学自治を求める学生運動とも交流しながら、既存の社会体制の矛盾と価値観の亀裂を指弾するヒッピーが登場し、様々なカウンター・カルチャーが興隆する。このように60年代から70年代にかけ、アメリカ合衆国は怒れる若者たちの「反乱」の季節を迎える。ヒッピーと呼ばれた若者たちは、汚れたジーンズとよれよれのTシャツ、長髪にヒゲをたくわえ、ロックを愛好し、サーフィンとマリファナを旗印にして社会にストレートに怒りをぶつけた。それは全米を揺るがす大きな政治・社会・文化運動となる。

⁶³ 例えば、ボブ・ディラン、ジョーン・バエズ、マーロン・ブランド、チャールトン・ヘストン。マルコムX、ローザ・パークスなどの著名人も参加している。

⁶⁴ バダーマン 2007:122

このような社会状況のなかで、広宣布布が本格化する。ストリート折伏の時代の幕が開く。「反乱」の中心地の一つであった西海岸で、日蓮仏法とアメリカの若者世代が邂逅する。それは、戦争花嫁を中心とする日本人移民と日系人が、初めてアメリカの若者たちとの直接的に出会うことを意味した。大きく価値観の隔たった異文化同士の出会いと交流が始まるのである。そして、それはときに激しい火花を散らすものであったとしても、少しも不思議ではなかったというべきだろう。

8. “Phase II” へ向かって

あらためて考えてみれば当然のことかもしれないが、この時代の NSA の広布の第一線にあった日本人は、第二次大戦前の日本において軍国主義教育を受けた人々が大半であった。戦争花嫁しかり、ウィリアムスをはじめとする日本から渡米した幹部もまたしかりである。戦後日本でも民主国家としての再建とともに民主主義教育が開始されたし、そして、その本家本元の自由と民主主義の国に生活の場を定めることになったわけであるが、彼らの幼少期に涵養されたパーソナリティの深い層に、戦前期の日本人の物の見方や考え方、つまり価値観が横たわっていたとしてもそれは自然なことではないだろうか。

そういう世代の日本人とアメリカのヒッピー世代の若者たちの間で、日蓮仏法を介して、いったい何が、どのようにコミュニケートされたのであろうか。混みいった経緯や偶然がなければ、広大な太平洋を越えて出会うこともなかったような両者が、いかにして真剣な議論や親身なやりとりと、そして、心を一にして題目を唱えるに至ったのであろうか。その興味深いプロセスを順を追って詳らかにしていこう。

この時代の NSA を特徴付ける顕著な活動が、ストリート折伏とコンベンションである。60年代半ばから70年代半ばまで10年あまり大量の会員獲得が継続したが、これらの会員の大部分は当時強力に進められたストリート折伏によって入会し、全米の様々な都市を舞台に繰り広げられた大規模なコンベンションに多大な時間や労力を傾けた。ストリート折伏とコンベンションは車の両輪のようになり、この時期の NSA の大躍進の原動力を支えまた伝えた。

この時期、いかに NSA の拡大が急速であったのか、常にそれを念頭におくことは重要である。1967年に三本部体制が敷かれたわずか一年後にさらに一本部が加えられ、NSA はロサンゼルス本部、サンフランシスコ本部、ニューヨーク本部、ハワイ本部の四本部の下に20総支部を設置する体制となる。

コンベンションが開始されるのは、そのような上昇気流の中でのことである。1968年8月にハワイで開催された第5回全米総会が最初のコンベンションである。それまでも全米総会は、1963年に第1回シカゴで開催されて以来、回

を追うごとに規模を拡大し実施されていたが⁶⁵、このとき以来、コンベンションとして実施されるようになる。コンベンションがそれまでの全米総会と異なる点は、開催都市の一般市民に向け公開される行事を盛大に行い、それに付加する形でNSAの年次総会を実施するという形式を整えたことである。

コンベンションによって、NSAがアメリカ社会の一般市民に直接にその存在をアピールする機会を得たことは重要である。またコンベンションとともに、アメリカ社会に直接日蓮仏法のエッセンスを伝える、「NSAセミナー」と称する仏教セミナーを全米の多くの大学を舞台に開始したことも、特記すべき事項である。NSAセミナーについても稿を改め考察する。

コンベンションは、「NSAのアメリカ社会への融合」を意図して始められた⁶⁶。それは規模においても、企画内容においても、それまでの総会とは趣をまったく異にした。1968年のハワイ・コンベンションにおいて、初めてブラスバンドと鼓笛隊を中心とするパレードが行われた。ハワイアンの正装でもあるムームー姿の婦人部の1000名もパレードに加わり、総勢およそ2000名がホノルル随一のメインストリートであるカラカウア・アヴェニューで多くの観光客を含む一般市民の目を楽しませた。

NSAのトップリーダーであったウィリアムスは、コンベンション路線を強力に推し進めたが、このときコンベンションを開始するについて興味深いコメントを残している。

アメリカ人はパレードが好きというひとつの見方がある。概して言えば、確かにアメリカ人は音楽が好きである。リズム感がよいとも言える。しかし、規則正しく隊列を組んで行進することはどうであろうか。少なくともNSAの鼓笛隊を結成した女子青年部メンバーは、ユニフォームにも、演奏にも全く縁のない素人が多く、抵抗感もかなり強かったと思われる。執行部からの強い求めに応じて鼓笛隊を編成した彼女たちは、パレードを実施する日までの練習、当日の沿道の人々の暖かい声援、指導部たちとの親密な対話等を通して、パレードによっても何かを訴えることができる、充実感を得ることができるというように変化していったのである。執行部の企画したことは、参加者の好悪に関係なく、多くの若者によるパレードを通じて、開催市にさわやかな印象を残すことであり、NSAのアメリカ社会への貢献への決意を示すことであった⁶⁷。

後の論点となるが、なぜ「抵抗感」の強いパレードが「参加者の好悪に関係

⁶⁵ 第1回全米総会は1963年8月シカゴ(参加者1,500名)、第2回は1965年1月ロサンゼルス(2,300名)、第3回は1966年8月ニューヨーク(3,400名)、第4回は1967年8月サンフランシスコ(4,000名)で開催された。

⁶⁶ ウィリアムス 1989:240

⁶⁷ ウィリアムス 1989:240-1

なく」実施されることになったのだろうか。また、そのどこにどのような「抵抗感」があったのだろうか。この点については、1976年以降のNSAの歩みをたどるとき踏み込んで考察しよう。ともあれ、大規模なコンベンションは1968年以降毎年実施され、そして、1976年でいったん終了することになる⁶⁸。

ともあれウィリアムスは、コンベンションによって「アメリカ社会への貢献の決意を示す」という「執行部の目的は、ほぼ達成された」と述べている。ウィリアムスはその著書のなかで、このときのコンベンションにメインランドから約1万人もの参加者があったこと、そして、このときのハワイ州知事、ホノルル市長、2名の上院議員、2名の下院議員から祝賀のメッセージを得たことを誇らしそうに書き残している⁶⁹。

もう一つの、この時代のNSAの特徴的な活動であるストリート折伏の成果がいかに顕著なものであったかは、残されているいくつかの資料から知ることができる。1965年の会員数は公称2万世帯であったが⁷⁰、翌年から折伏キャンペーンの推進によってアメリカ人の入信が急増したため大きく伸びる。折伏キャンペーンの成果は著しく、例えば、1966年2月の弘教成果として、日本の創価学会の全支部を含めても、トップの成績を収めたのはサンディエゴ支部(263世帯)であり、2位はサンフランシスコ支部(257世帯)であった。1967年6月以降は全米で毎月2,000世帯を上回る入信があり、とくに9月には3,268世帯に上った。そして、年末には公称5万世帯に達している⁷¹。

1968年および1969年の2年は、NSAの「草創期型の熱烈な弘教運動のピークをなす期間であった」とウィリアムスは述べている⁷²。このときがストリート折伏の全盛期であり、それは会員獲得に非常に大きな成果を収めた。それでも、当時を振り返りウィリアムスは、折伏のたんに「量」だけが目的ではなかったという語調の記述を残している。

つまり、弘教だけでなく教学も重視したのだと強調している。「教学運動は、この頃からNSAの重要な活動内容となっていた。教学は、だが、教学のために提起されたものではなく、信仰のため、日々の活動の源泉となるために重視されていた。だが、やがて、教学運動の高まりの中で、弘教を控え、教学を

68 77年フィラデルフィア、78年サンフランシスコ、またそれ以降も間欠的に「コンベンション」は実施されたが、68-76年までとは質量ともに異なるものとなった。ウィリアムス自身、「(68)年以後、NSAは、1976年まで毎年コンベンションを開催」と述べている(ウィリアムス 1989:240)。

69 ウィリアムス 1989:241

70 この数字が公称であるのは、世帯数=本尊流布数であり、またかならずしも定着した会員数ではないという意味である(ウィリアムス 1989:231-2)。このときの定着した会員数は厳密に考えると約4千名であるという推計がある(ハモンド/マハチェック編 2000:64)。しかし、ここでは実数よりも「伸び」に着目しているので、公称の数字にも意味があると考えられる。

71 ウィリアムス 1989:233/237

72 ウィリアムス 1989:238

中心に NSA の活動が展開されることとなった」のだという⁷³。

じつは「弘教を控え、教学を中心に」据えるのは 1976 年以降のことである。しかし、このときから、数のみを求める弘教のための弘教、あるいは折伏拡大路線ではなく、教学を重視しなければならないという問題意識があったということに注意を払っておこう。そして、1976 年が NSA にとってどのような年であり、どのような方針の転換があり、それがなぜ生じたのかはこれも後に論じよう。

さて、もう一度話を戻し、折伏キャンペーンの成果を時代を追ってもう少し確かめよう。「白人の青年の入信が目立って多くなっていった」のは、1968 年 2 月から展開した大規模な折伏キャンペーンの頃からであるという⁷⁴。そして、この 2 月のキャンペーンの成果はそれまでの最高の 5,497 世帯に達したという。

翌年の 1969 年に入るとさらに入信者が激増する。この年 2 月の折伏キャンペーンの成果は、7,136 世帯もの入信者のあったことが記録されている⁷⁵。そして、この後も 69 年を通じて、毎月 7,000 世帯を越える入信者があったという。この時期、NSA はいかに急速に拡大を続けていたのかがよく分かるだろう。

1969 年 7 月に、カリフォルニア州サンタモニカにおいて第 6 回全米総会とコンベンションが実施される。このときウィリアムスは次のように「かなり鼻息の荒い」スピーチをしたと自ら著書で述べている。つまり「1970 年の次回のコンベンションまでに、団結して 15 万世帯を達成しようではないか」と呼びかけたのである⁷⁶。

ハワイ・コンベンションのときに立てられた目標は、翌年のコンベンションまでに 7 万世帯の達成であった。このとき世帯数は 5 万であったから、69 年夏までに 7 万世帯が達成できれば、1972 年に 10 万世帯が達成できるだろうと想定のもと、この数字が目指された。72 年に 10 万世帯を達成するというのは、67 年のエチワンダの妙法寺の落慶のとき、池田会長より与えられた目標であったという。

つまり、68-69 年の会員数の伸びは、折伏キャンペーンを強力に主導したウィリアムス自身にとっても、ある種、予想以上の大成功だったのかもしれない。しかし、1969 年までに「10 万世帯をゆうに越す組織となった NSA は、1970 年以降、全体の世帯数も、具体的な弘教成果も発表を控えるようになった。弘教の本義からいって、競争して成果を争うところに意義があるわけでない。慎重な弘教を継続的に実践していこうと」考えたのであるという⁷⁷。

急激な大成長それ自体が、NSA を次なるステージへと押し上げる時期を近

73 ウィリアムス 1989:238-9

74 ウィリアムス 1989:239

75 ウィリアムス 1989:242

76 ウィリアムス 1989:244

77 ウィリアムス 1989:244-5

づけたということなのかもしれない。ともあれ、70年以降はペースダウンはしたもののコンスタントな組織拡大は続き、地域的な広まりもみられるようになる。つまり、「西海岸、東海岸とシカゴ、ハワイを中心としたNSAの活動は、南部諸州にも拡大されたし、中西部の内陸部まで浸透していったのである」⁷⁸。この時期、NSAは急速に「アメリカ化」しつつあったと考えることができるだろう。

さてここまで60年代のアメリカ合衆国の動揺と、そのような社会状況のなかでのNSAの躍進について述べてきた。70年代の中頃以降、NSAはおおきな変化を経験する。それは今日から振り返れば、日蓮仏法＝創価学会が第二段階アメリカ化の局面に入ったことを意味したが、非常に大きな試練を伴うものであった。この時期以降については稿を改め論じることにする。

なお、本稿は、平成23～25年度科学研究費基盤研究（B）「欧米多民族社会における日本型新宗教の受容と発展—新たな共同性と宗教の役割」（研究代表者・秋庭裕）による研究成果の一部である。

また、本稿で用いたデータの収集にあたって、創価学会国際広報部を通じSGI-USAの多くの会員にお会いできる貴重な機会を得ることができた。ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

⁷⁸ ウィリアムス 1989:245

文献一覧

- 秋庭裕・川端亮 2008 「ハワイからスタートしたSGI」渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本 2008』平凡社
- バダーマン、M・ジェームズ（水谷八也訳） 2007 『黒人差別とアメリカ公民権運動』集英社新書 集英社
- Hammond, P., and D. Machacek 1999 *Soka Gakkai in America: Accommodation and Conversion*. New York: Oxford University Press. (栗原淑江（訳）2000 『アメリカの創価学会—適応と転換をめぐる社会学的考察』紀伊国屋書店)
- 堀日亨編 1952 (2005) 『日蓮大聖人御書全集』創価学会 (第241刷)
- 池田大作 1965 『人間革命』第1巻 聖教新聞社
- 池田大作 1975 『私の履歴書』日本経済新聞社
- 池田大作 1992 『人間革命』第11巻 聖教文庫 聖教新聞社
- 池田大作 2007 『生命の変革 地球平和への道標』創価学会広報室
- Ikeda Daisaku 2008 “May My Friends in America be Glorious”(JPN) World Tribune Press
- 井上順孝 1985 『海を渡った日本宗教』弘文堂
- 江成常夫 1981 『花嫁のアメリカ』講談社
- 江成常夫 2000 『花嫁のアメリカ歳月の風景 1978-1998』集英社
- 堀内一史 2010 『アメリカと宗教 保守化と政治化のゆくへ』中央公論社
- 川端亮 2010 「新宗教における二段階の英語化—SGI-USAの事例から—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第36巻
- 川端亮・秋庭裕・稲場圭信 2010 「SGI-USAにおけるアメリカ化の進展—多民族社会における会員のインタビューから—」『宗教と社会』第16号
- 中野毅 1985 「アメリカ社会とNSA(2)」『講座・教学研究』第4集 東洋哲学研究所
- なかほ
央 忠邦・浅野秀満 1972 『アメリカの日蓮正宗』仙石出版
- Parks, Yoko Yamamoto 1980 “Nichiren Shoshu Academy in America: Changes in during the 1970s.” *Japanese Journal of Religious Studies* 7(4): 337-55
- 三代会長年譜編纂委員会編 2003 『創価学会三代会長年譜 上巻』創価学会
- 三代会長年譜編纂委員会編 2005 『創価学会三代会長年譜 中巻』創価学会
- 聖教新聞社企画部 2005 『新会員の友のために1改訂版』聖教新聞社
- The Nichiren Shoshu Sokagakkai 1966 “The Nichiren Shoshu Sokagakkai” The Seikyo Press
- 上藤和之・大野靖之編 1975 『創価学会四十五年史 革命の大河』聖教新聞社

ウィリアムス、G.M. 1989 『アメリカにおける宗教の役割』潮出版社

山中速人 1993 『ハワイ』岩波書店

安富成良／スタウト・梅津和子 2005 『アメリカに渡った戦争花嫁』明石書店

Fifteen Years of SGI-USA (1)
Americanization and Post-Americanization of a new Japanese religion

Yutaka Akiba

This paper discusses how Soka Gakkai International (SGI), a largely Christian society comprised of people of many different racial backgrounds, has been accepted in the US. The paper focuses on the history of the propagation of SGI, their conversion process, and the impact of the concepts of Nichiren among new believers.

Many believers of Japanese religions that proselytize overseas are of Japanese origin or descent, but SGI has more than 12 million members in 192 nations and regions, including not only Japanese people living abroad, but also non-Japanese. SGI has more than 110,000 members in the US, many of whom are Americans. So how has Soka Gakkai, a religion said to be grounded in Japanese Buddhism and to have a collectivistic bent, been accepted in the US, which differs from Japan in its language, emphasis on liberalism and individualism, and Judeo-Christian cultural background?

Studies have already identified several reasons that Japanese new religions are being accepted by overseas natives, such as the use of the native language in meetings, the translation of teachings, the adaptation of religious rituals to local lifestyles, the appointment of natives as religious leaders, and an emphasis on detailed personal guidance. These factors also applied to SGI-USA during the 1960s and 1970s. Preceding studies have claimed that SGI-USA had been indigenized by 1980.

In this paper, I will report on SGI-USA based on research conducted over the past seven years, and re-examine the Americanization of SGI-USA.